

辺境の文学史

——大伴旅人と漢詩文——

一 はじめに

大宰府が「遠の朝廷」と呼ばれたのは、天皇の支配する都の朝廷の延長上にあることの呼び名であるが、それ自体は天皇の詔を受けて地方へと下る御言持ちたちの意識を支える言葉でもあった。しかし、遠の朝廷の大宰府は、そこがいかになりっぱな庁舎や楼閣が立ち並んでいても、奈良の都からはまさに遠い距離にあつて、辺境の地に過ぎなかつたことも事実である。それは、単に距離的な問題のみばかりではない。この大宰府の辺境性は、そこが都から遠く離れた鄙であることを教え、かつ、大宰府がまた流謫の地でもあるという思いをも抱かせたのである。二項対立の図式から見れば、すでにいわれているように「都と鄙」という図式である。

辰 巳 正 明

これを、そのまま大宰府の文学の本質とするならば、この中から思い描かれるのは、あの懐かしい奈良の都であり、望京への思いであつた。そのような思いを代表することく詠んだのが、当時大宰大式であつた小野老の「あおによし寧楽の京師は咲く花の薫ふがごとく今盛りなり」(卷三・三二八)⁽¹⁾の歌であつたらう。懐かしい奈良の都は、その思いが深ければ深いほど美しく幻想されることになる。そうした思いは、明らかに辺境性(都への強い意識)によるものであり、その思いの中から大宰府の文学は成立したといえる。

もつとも、ここが遠の朝廷であるということも彼らの共通した意識である。それは「官」の意識である。その官の意識が優先する段階では、都の奈良を思慕することで済むであらう。その限りでは、防人司佐の大伴四綱の詠んだよ

うに、

やすみししわご大君の敷きませる国の中には京師し思

ほゆ（巻三・三二九）

藤波の花は盛りになりにけり平城の京を思ほすや君

（同三三〇）

という「思ひ」によって完結する。

小野老や大伴四綱らと同じ折りに大宰府の帥であった大伴旅人も、大宰府が遠の朝廷であることを彼らと同じように「思ひ」のである。おそらく、旅人が大宰府へ着任して間もない頃であったのだろう。少弐の石川足人から古里の左保を恋しく思いますかと問われて、

やすみししわご大君の食国は倭も比処も同じとそ思ふ

（巻六・九五六）

と答えている。天皇の支配する国は、倭も九州も同じだという旅人のこの「思ひ」には、遠の朝廷の長官としてのそれがあると見られるが、それでありながら、ここを奈良の都と「同じ」だと思ふことで、むしろ辺境性を内包させたということでもあるように思われる。官と等しくあることが旅人の長官としての立場である以上、ここには矛盾はないように見えるが、むしろ、大宰府の辺境性への意識が「同じ」だという意識へとすり替えられているように思われる。なぜなら、旅人は大宰府へ着いて間もなく妻を失い、さら

に旅人の身に降り懸かる悲しみの中で、

世の中は空しきものと知る時しいよよますます悲しかりけり（巻五・七九三）

りけり（巻五・七九三）

と歌い、大宰府は旅人に世間の無常を強く教える辺境として存在することになったといえるからだ。さらにもう一つ、大宰大弐の丹比県守が民部卿に遷任するに当たり贈ったという歌がある。

君がため醸みし待酒安の野に独りや飲まむ友無しにし

て（巻四・五五五）

この「待酒」というのは、友と「良遊」をするための酒であり、「野」は「世俗」を離れた清らかな自然を意味している。その「野」はさらに「官」と対立するところの場所でもあることを示唆している。むしろ、ここでは官を離れて「独り」飲む酒の姿を「野」にあるというのであろう。これもまた、旅人の辺境性を示す姿であると見られる。

ところで、このような辺境性がどのような文学を創造するかという問題は、それ自体を文学史の一つの課題として考える必要がある。それが重要な問題として問われなければならないのは、辺境性が地理的な関係を示すのみでなく、その辺境性が「東アジア的」な文化価値として現れるところにあるからである。旅人の大宰府における文学は、山上憶良のそれとともに、明らかに大陸の文化と深くかかわる

ものであることが知られるからである。それは、東アジアの辺境の文学として現れる文学史の問題であることを示唆する筈である。

二 賢 良

酒が官を離れて、むしろ「野」に属するものだという考へは、どのようなことであるのか。それは、例えば、藤原万里が述べたような立場と共通しているように思われる。

僕は聖代の狂生ぞ。直に風月を以ちて情と為し、魚鳥を翫と為す。名を貪り利を狗むることは、未だ冲襟に適はず。酒に対かひて当に歌ふべきことは、是れ私願に諧ふ。良節の已に暮るるに乗りて、昆弟の芳筵を尋ぬ。一は曲ひ一は盃み、勸情を此の地に尽くし、或は吟き或は詠ひ、逸気を高き天に縦にす。千歳の間、嵇康は我が友。一酔の飲、伯倫は吾が師。軒冕の身を榮えしむることを慮らず、徒に泉石の性を樂しむることを知るのみ。（暮春弟が園池にして置酒す）

万里は「聖代」に対して、自らは「狂生」であることを標榜する。その狂生とは、「風月」「魚鳥」への関心であつて、名誉や利益を求めることではないのである。したがつて、良い季節には兄弟の宴に赴き、酒を飲み歌を歌い心を縦にすることであつた。そのような生き方は、嵇康（三国

魏の時代の人。竹林七賢の一人で、老莊思想および琴・詩・酒を好んだ）を友とし、伯倫（劉伶。竹林七賢の一人）を師匠と仰ぎ、したがつて、高い地位や榮譽などを考えず、ただ、美しく清らかな自然に親しむことである。

ここには、奈良朝初頭における「酒」への立場の一つが明確に窺えるだろう。その立場こそ、名誉や利益への批判をとおして、嵇康や劉伶の生き方を理想とするものであつた。それは「狂生」として生きることであり、「野」に自らを置くことであり、そしてそれは文雅や風雅に接近することでもあつた。酒が、まずこのような在り方として示されていることを確認して置く必要がある。それが、奈良朝初頭の思想的状況を示してもいたということであり、この思想的状況は、旅人の「讚酒歌十三首」（卷三・三三八〜三五〇）とも重なるものであることは直ちに理解できよう。それは、旅人の主体が「賢しら」なるものへの批判に現れていることによつて確かめることができる。

賢跡 物言従者 酒飲而 醉泣為師 益有良之（卷三・三四一）

賢しみと物いふよりは酒飲みて酔泣きするしまさりたるらし

痛醜 賢良乎為跡 酒不飲 人乎癸見者 猿二鴨似（同三四四）

あな醜賢しらをすと酒飲まぬ人をよく見れば猿にかも似る

默然居而 賢良為者 飲酒而 醉泣為介 尚不如來

(同三五〇)

默然をりて賢しらすは酒飲みて醉泣するになほ若かずけり

この「賢しら」という語は、讚酒歌十三首を解く重要な言葉であることを示唆している。「賢しら」はその表記に「賢良」とあるように、漢語の「賢良」の翻訳語であろうといふことである。「賢しら」が「賢良」と表記されていることはもとより、それが「賢良」の翻訳による言葉であると考えられる。何よりも「賢良」とは、儒教政治の理念を皇帝に対して対策する者を指し、それがすぐれた官吏の基準ともなった。それがどのように讚酒歌の世界とかわるのか、その制度的展開を確認することから見ておきたい。

漢の武帝は元光元年五月に「賢良の詔」を出している。

これは『文選』(第三十五)にもおさめられている。それによると、武帝は昔の堯・舜がすぐれた政治を行ったことを知るにつけ、どのように行えばそうした立派な業績や徳を示すことが出来るのかと問い、

朕之不敏、不能遠徳。此子大夫親聞也。賢良明於古今

王事之体。受策察問、咸以書對、著之于篇。朕親覽焉。⁽⁴⁾
と、公孫弘および董仲舒に策を以て答えるように命じるのである。賢良とは、このような役割を負っていたのである。また、『漢書』の董仲舒伝によると、武帝の即位の後に「賢良」などの推挙があり、武帝は彼らに索問したことが見える。これによって、「賢良」がどのような理念として存在したか理解できる。

①武帝即位挙賢良文学之士、前後百數、而仲舒以賢良對策焉。制曰、朕獲承至尊休徳、伝之亡窮而施之罔極、任大而守重是以夙夜不皇庚寧。永惟万事之統猶懼有闕、

②故広延四方之豪雋、郡国諸侯公選賢良脩潔博習之士、欲聞大道之要至論之極。今天子大夫褒然為挙首。朕甚嘉之。子大夫其精心致思。朕垂聽而問焉。

③蓋聞、五帝三王之道、改制礼作樂、而天下洽和、百王同之。当虞氏之桀莫盛於詔、於周盛於勺。聖王已没、鐘鼓箎絃之声未衰、而大道微缺、陵夷至虐桀紂之行、王道大壞矣。夫五百年之間、守文之君、当塗之士、欲則先王之法、以戴翼其世者甚衆。然猶不能反、日以仆滅、至後王而後止。豈其所持操或諄繆而失其統與。固天降命、不可復反、必推之於大衰、而後息與。烏虜、凡所為屠屠、夙興夜寐、務法上古者、又将無補與。三代受命其符安在。災異之變、何縁而起。性命之情、或

天、或寿、或仁、或鄙、習聞其号、未燭厥理。

④伊欲風流、而今行刑輕而姦改、百姓和樂、政事宣昭、何脩何飾、而膏露降、百穀登、惠潤四海、沢臻艸木、三光全、寒暑平、受天之、享鬼神之靈、惠沢洋溢、虜方外延及群生。

⑤子大夫明先聖之業、習俗化之變、始終之序、講聞高誼之日久矣。其明以諭朕。科別其条、勿弁、取之於術、慎其所出。

⑥迺不正、不直、不忠、不極、枉于執事、書之。不泄。興于朕、毋悼。後害、子大夫、其尽心、靡有所隱。朕將親覽焉。⁽⁵⁾

ここでの主旨は、およそ次のようである。①天子の位に即いたが、その責任は大きく、不安である。②広く四方の秀才・賢良などを選び、私の問いに応えよ。③五帝・三王の時代は天下が和樂した。しかし、次第に王道は衰退した。周の時代は法度を守り世を助ける者が多かったのだが、日々滅び、後世の王に至って止んだ。④一体、どのようにすると甘露が降り、百穀が登り、天の祝福を受けることができるのか。⑤子大夫は先聖の業績を良く学び知るところであるので、私に教えよ。細かく出典も明らかにして、個々に論じよ。⑥公卿の政治に不正や不直・不忠などが有れば、隠さずに書くこと。他に漏らすことはないので、後難を恐

れる必要はない。

賢良の者は、このようにあるべき政治の道理を出典に基づきながら明らかにするとともに、また、公卿などで不正・不直・不忠などの者については、隠さず詳細に記せというのがこの賢良の詔である。

董仲舒は賢良に選ばれて、この詔に詳しく応えるが、その内容は儒教の徳による政治がどのようなものであるかを、『春秋』や孔子などの言葉を多く引用して、天子が行うべき徳治政治の具体的な方法に至るまで説き明かすのである（『漢書』董仲舒伝）。吉川幸次郎氏によれば、ここで董仲舒は世の中を良くするには、学問の教養あるものが官吏となるべきこと、学問とは孔子の道であり、教養とは易・書・詩・礼・楽・春秋の六芸であり、それらに合致しない学問・思想は排斥すべきであると進言し、武帝に取り入れられ、儒学の教養ある人材を推薦させ、天子みずから試験を行うという制度が成立し、以後中国二千年の歴史を貫く理念となったのだという。⁽⁶⁾

およそ、「賢良」がこのような理念をもつものであるところから見るならば、その「賢良」として推挙された者は、まさに天子の政治の誤りを直言して匡し、徳の有る政治の実行のために対策をもって示す、すぐれた官吏の理想像であることになる。それが、古代日本の政治制度の中に見ら

れることは、「詔。五位已上、挙賢良・方正之士。」（『続日本紀』大宝三年七月）とあることである。この記事は、『漢書』文帝紀・宣帝紀に基づいたものであろう。この後、律令体制は儒教の徳治政治の実現のために、董仲舒のしめすような徳に基づく政治の理念が詔として屢々出されることになるのである。旅人は、そのような折りに大宰府の長官として大宰府あつたのである。

三 七 賢

万葉集に宴の歌を多く見ることは出来るが、酒そのものを詠むということは現れていない。それだけに、旅人の「讃酒歌十三首」は、万葉集の中でも特異な性格を持つものであることが知られる。その特異さは、酒を詠みながらも、自らの人生に深くかわる内容を詠み、酒はその比喩的な象徴として用いられているといってもよい。それは、酒が精神的な文化を語るものとして存在していることを意味している。その文化とは中国の酒の文化によって形成されたものでことは明らかである。

酒は、中国文学の中で三つのありかたを示しているように思われる。その一つは、古くから人生の短さを嘆き、その憂いを解く道具として詩に詠まれて来た。漢の楽府「西門行」は、その著名なものである。

出西門 歩念之 今日不作樂 当待何時（一）

釀美酒 炙肥牛 請呼心所懼 可用解憂愁（三）

人生不滿百 常千歲憂 昼短苦夜長 何不秉燭遊（四）⁽⁸⁾

これは、『文選』にも古詩十九首に収められている。酒に人生の短い嘆きを寄せるのは、以後に流行することになる。

魏の武帝曹操も、「短歌行」（『文選』樂府）で、

對酒當歌 人生幾何 譬如朝露 去日苦多

慨當以慷 憂思難忘 何以解憂 唯有杜康⁽⁹⁾

と詠むのは、人生の嘆きを酒によって晴らすという関係が定着していることを示している。

しかし、酒がある特別な意味を持ち出したのは、先にも登場した竹林七賢によるものが大きいといえる。これが二つ目の酒である。劉伶は藤原万里も師匠と仰いだ竹林七賢の一人である。漢代の儒教主義は徳を求めるあまり、形式に流れ、さらに虚偽の徳をも通用させる悪弊を招くことになったのである。したがって、「眞実」を求める理想主義者たちは、老荘思想に身を置くことになるのである。劉伶の「酒徳頌」はそのような立場を標榜するものである。

大人先生というもの有り。天地を以て一朝と為し、万期を須臾と為し、日月を肩膊と為し、八荒を庭衢と為す。行くに輒迹無く、居るに空虛無し。天を幕とし地を席とし、意の如く所を縦にし、止れば則ち卮を操り

觚を執り、動けば則ち榼を拏げ壺を提げ、唯酒のみを是れ務む。焉んぞ其の餘を知らんや。貴介公子、縉紳処士というもの有り。吾が風声を聞き、其の所以を議す。乃ち袂を奮い襟を攘い、目を怒らし齒を切し、礼法を陳説し、是非蜂起す。先生は是に於いて方に罌を捧げ槽を承け、杯を銜み醪を漱り、髻を奮つて跣跣し、麴を枕にし糟を藉き、思うこと無く慮ること無く、其の楽しみは陶陶たり。兀然として酔い、轉爾として醒む。静聴すれども雷霆の声を聞かず、塾視すれども泰山の形を覩ず。寒暑の肌に切に、利欲の情に感ずるを覚えず。俯して観るに、万物の擾擾たるは、江漢の浮萍を載するに焉如。二豪の側に侍するは、蜾蠃の螟蛉に與けるに焉如。

大人先生とは、宇宙の大道を体得した人のことで、すべてを知り尽くし、何も思うことなく酒のみを相手としている。その大人先生の元に、貴介公子という家柄の良い若者と、縉紳処士という貴頭のすぐれた男が先生の評判を聞いて訪ねて来て、その生き方を「目を怒らし齒を切し」て議論をはじめたというのである。いわば、二人の紳士は儒教の礼儀を象徴する存在である。それに対して先生は酒を飲みつつ、麴を枕に何も考えることなく陶然としていた。先生はただ酔い、雷の音も耳に聞こえず、泰山も目に入らず、

欲に動かされることもなく、二人の立派な紳士も、結局先生感化を受けることになったという。

旅人の讃酒歌も、この思想の流れにあることは間違いないであろう。旅人が竹林七賢も欲したものは酒であった(三四〇)というのは、七賢の生き方への共感であるが、そこには「賢良」への批判とともに、「七賢」を肯定するという「賢」の逆説が現れていて、むしろ、「賢」とはこちら側に属するものだという旅人の主張を見ることができるようになる。

この劉伶の酒は、儒教の世俗性への批判である。儒教という世俗とその宮廷に対して、酒はそのような世俗を超えたものとして用いられていることは明らかである。竹林は清らかな自然であり、酒はそれのみですべてを語り尽くしている。それ以上の言葉を必要とはしていない。それが劉伶の酒であり、酒によってしつかりと批判の目は据えられ、自信に満ちていると言える。そして、旅人もそのような姿を示している。酒を飲まない者を「猿にかも似る」(三四四)というのは、七賢の清談の特色とする諧謔である。それは例えば阮籍が「君子之处域内、何異夫蝨之处禪中乎」(『晋書』「大人先生伝」というときである。

しかし、「讃酒歌」を全体から見たとき、旅人のそれは劉伶のように自信に満ちた姿ではないように見える。劉伶の

みでなく、七賢たちの伝説は『世説新語』に見られるが、いずれも自信に満ちた生き方が描かれているのである。それに対して、旅人の姿には七賢には見られない深い「孤独」の影を読み取ることができるよう思われるのである。

なぜ、旅人には孤独の影が纏い付いているのか。それは、「讃酒歌」が新たな酒に出会ったことを示唆しているように思われる。その酒とは陶淵明の「酒」であり、淵明の酒に触れたことが旅人の孤独感の形成を示唆しているのではないかということである。これが三つ目の酒の問題である。

四 陶淵明

陶淵明は官に仕えても、すぐに辞職するということを繰り返す。県の役人であった時に、県を巡視する役人が来るというので、「衣冠束帯で迎えるように」という指示があったが、淵明は「我れ豈に能く五斗米の為に腰を折りて郷里の小児に向かわんや」といい、即日辞職し、「歸去来」を賦したと伝えるのは著名な逸話であるが、そのみではなく、淵明の辞職の理由には、腐敗した政治への怒りがあった。郷里の田園に帰った淵明は畑を耕し、酒をもってその思いを綴る。

少日に及んで、眷然として帰らん歎の情有り。何となれば、質性自然にして、矯勵の得る所に非ず。飢凍切

なりと雖も、己に違えば交々病む。嘗て人事に従いしも、皆口腹に自ら役す。是に於て悵然として慷慨し、深く平生の志に愧ず。猶お望む、一稔にして当に裳をぬめて宵逝すべしと。

官についてしばらくすると、故郷に帰りたいという気持ちが起こったという。生まれながら自然を好み、その性格は直すことができない。飢えや寒さには慣れていても、自分の信念に背けば悩むことになる。かつて仕官したのも食うためにこの身を苦しめたのであり、そのことを思うと後悔に駆られて、平生の志しに違ふことを恥じるのだという。そこで田園の自然の中に帰り、淵明は「酒」にこそ「真実」があると歌う。ここに淵明の「自然」と「志」とのありようを見ることが出来る。おそらく、酒をもってそうした思いを述べたもので、もつともよく淵明の思想を語るものは「飲酒二十首」であろう。閑居している折り、酒を飲みながら書きしたためた詩句が溜まったので、友人に清書してもらったものだという。

其二

積善云有報 善を積めば報い有りと言うに、
夷叔在西山 夷叔は西山に在り。

善惡苟不応 善惡苟も応ぜずんば、
何事空立言 何事ぞ空言を立てし。

九十行帶索 九十にして行つ索を帯にし、
飢寒況當年 飢寒當年に況う。

不頼固窮節 固窮の節に頼らずんば、
百世当誰伝 百世当に誰か伝うべけん。

其三

道喪向千載 道喪われて千載に向とし、

人人惜其情 人人其の情を惜しむ。

有酒不肯飲 酒有るも肯えて飲まず、

但顧世間名 但だ世間の名を顧る。

所以貴我身 我が身を貴ぶ所以は、

豈不在一生 豈に一生に在らずや。

一生復能幾 一生復た能く幾ばくぞ、

倏如流電驚 倏かなること流電の驚かすが如し。

鼎鼎百年内 鼎鼎たり百年の内、

持此欲何成 此れを持して何をか成さんと欲する。

其の六

行止千万端 行止は千万端、

誰知非與是 誰か非と是とを知らんや。

是非苟相形 是非苟りに相形べ、

雷同共誉毀 雷同して共に誉め毀る。

三季多此事 三季より此の事多し、

達士似不爾 達士のみ爾らざるに似たり。

咄咄俗中愚 咄咄俗中の愚、
且当從黃綺 且く当に黃綺に従うべし。

其の十一

顔生稱為仁 顔生は仁を為すと稱せられ、

榮公言有道 榮公は有道と言わるるも、

屢空不獲年 屢々空しくして年を獲ず、

長飢至於老 長に飢えて老に至る。

雖留身後名 身後の名を留むと雖も、

一生亦枯槁 一生亦た枯槁せり。

死去何所知 死し去りては何のし所ぞ、

称心固為好 心に称うを固より好しと為す。

客養千金軀 千金の軀を客養するも、

臨化消其宝 化に臨んでは其の宝を消す。

裸葬何必惡 裸葬何ぞ必ずしも惡しからん、

人当解意表 人当に意表を解すべし。

この「飲酒」に託した淵明の思いの一つは、「固窮の節」

(其の二)を守ることであった。いかなる困窮の時にも信

念を曲げないで生きるといのがそれが、しかし、今は

「道」(其の三)が失われて、世間の人は真の心を出し惜し

み、さらには、酒が有っても飲もうとはせずに、ただ「世

間の名」(其の三)のみを求め。しかし、一生は稲妻の光

のようなもので、瞬時に過ぎ去るのだから、短い一生を世

間体を気にしているわけにはいかないと。したがって、「人境」(其の五)に家を構えて住むと、世間の喧噪も無く、美しい自然があり、この自然の中にこそ「真意」(其の五)のあることを説く。また、人の行いは千差万別なのに、その是非を云々することが盛んで、「俗中の愚」(其の六)には困ったことだといひ、さらに、顔回(孔子の弟子)や榮啓期(貧士と呼ばれた高潔の人)も世間から称えられたが、顔回はいつも飢えて若死にし、榮啓期もひもじさの中で年老いたのであり、死後に名を残したとはいっても、死んだら何も分からないのだから、生きている時を大切にすべきであり、人はその「意表」(其の十一)、つまり、本当の意味を解すべきなのだといふのである。そして、「酒中に深き味わい有り」(其の十四)「人生百に至ること少なし」(其の十五)「濁酒聊か恃む可し」(其の十九)「世を挙げて真に復ること少なし」(其の二十)ともいふ。

ここには、淵明の「官」と「野」の対峙する関係を見ることができよう。その関係を示すと、次のようになる。

官	野
都市	田園・自然
儒教	老荘
世間の名	無名

形式	真実
雷同	固窮の節
非飲酒	飲酒
富貴	貧窮

このように、陶淵明は酒に託して野にあることのその思(真実を求めること)を語るのであるが、それは人として理想的な生き方であることにより、後の詩人たちへも大きな影響を与えることになった。

淵明が「固窮の節」を守るのだというのは、自己の信念に基づいて生きることを意味している。世俗を逃れ、自己の信念に生きる淵明のそれは、また深い「孤独感」を示すものでもあった。斯波六郎氏によると、陶淵明の孤独感には、一つに社会と調和できないことによるもの、二つに人生のはかなさを思うことによるもの、三つに自分の信念を守り続けることによるものがある¹³⁾と指摘している。中国文学において、酒が孤独感と深く結び付くのはこの陶淵明によるといえる。

旅人の場合を考えると、この三つに示される孤独感を讀み取ることができよう。大宰府にあって常に奈良の都を恋しく思う旅人の姿は、社会と調和していないことによるものかも知れないが、何よりも「讀酒歌」は社会に調和している人間の歌とは考え難い。また、人生のはかなさ

については、「世の中は空しきものと知る時し」（巻五・七九三）と歌い、「讃酒歌」でも「生ける者つひにも死ぬる者にあれば」（巻三・三四九）とも歌う。さらに旅人は「賢し」を強く否定する。「賢しら」と呼ばれた者たちは、おそらく淵明のいうように「名譽」や「利益」を求めた者たちであり、「世間の愚」を演じている者であることになる。それを否定して「固窮の節」、つまり自らの信念に生きること、それを歌うのが「讃酒歌」であり、そこに淵明の三つ目の孤独感が、その「酒」によって導かれていられると考えられる。これは、旅人の「讃酒歌」が陶淵明の文学をも通過しなければ成立しなかったということを示している。一般に淵明の影響は疑問視されているが、それは淵明の「飲酒」が『文選』には「雜詩二首」とあるのみで、それから淵明文学の影響を推測することはできないという問題であり、また、「陶淵明集」が上代に伝来していたか否かの確証は得られないという問題でもある。しかし、すでに見てきたように、旅人の「讃酒歌十三首」は、淵明を視点に入れない限りは読めないように思われるのである。（むしろ、淵明の影響が考えられないとする場合には、淵明を考えなくとも「讃酒歌十三首」が同じように読めることの説明が必要であろう。）

陶淵明の官と野の対峙する関係を、旅人にも及ぼすとす

れば、それは次のように示すことができるであろう。

官

奈良の都

儒教

世間の名

形式

雷同

賢しら

勤勉

野

大宰府・辺境・自然

老荘・七賢

無名・流謫・左遷

眞実

独り

酔い泣き

遊びの道・無為

この図式の中から、大宰府が奈良の都と激しく対立する場所としての姿を現しにくることに気がつく筈である。「奈良の都」、それはまぎれもなく「儒教の都」、つまり「賢良」の都に外ならない。そこは聖天子を仰ぎ、儒教の秩序によって賢臣たちがすぐれた学問と教養を身につけて、天皇に仕えている理想の都である筈である（しかし、この対立の図式は、儒教の都は、天皇に媚びへつらい、世間の名譽や利益を求め、雷同しては儒教の形式のみを重んじ、愚臣つまり賢良たちの欲に満ちた腐敗した都であることを示唆している）。それに対して「大宰府」は「老荘の都」、つまり「自然の都」へと変質していくのである。そこは無名の世界であり、眞実の世界であり、無為自然の世界である。いわば、「賢良」の価値の転倒は、新たな「老荘」という価値の創

出を可能にし、そして、旅人の特異な文学を成立させたのである。「倭も比処も同じ」といった旅人の中に、このような新しい都が生まれたことは、大宰府文学の成立に重要な意味を考えさせるのである。おそらくこのことの中に、旅人の「松浦河」の世界が成立することになるであろう。儒教の都である平城の都が「吉野」をもって儒教の都の聖なる場所を構築したごとくに、大宰府は松浦河をもって老荘の都の聖地を作り上げた。その文学空間は、たしかに辺境性の結果であるのだが、しかし、七賢や淵明が野を彼らの文学の中心性に変えたごとく、旅人のそれもそれらに繋がることで大宰府の文学をはじめて可能にしたのであろうと思われる。

このように、旅人の「讃酒歌」は、竹林七賢の思想や陶淵明の孤独感を引き受けながらもまず詠まれたものであると考えられるが、ここに決定的な相違を見ることができるとそれは、七賢にしても淵明にしても、その理念を実践する《行動者》であつたということである。しかし、旅人は行動者でももちろんなく、またそれを旅人に求めることもできない。そのような社会の成熟は当時の日本にはなかったからである。したがって、それは旅人のポーズであるともいえるのだが、その前に考えなければならぬのは、そのことが東アジアの辺境性の文学であるということを理解す

る必要があるということである。

いかに老荘の都を幻想しても、そこは天皇不在の都でしかなく、中心的な位置を占めることは不可能であつた。やはり奈良は懐かしい都であり、帰るべき場所であつたことは否定できない。「讃酒歌十三首」が「飲酒二十首」を受けて成立しながらも、淵明の揺るぎない信念からみれば、旅人の文学は大きな変容の中に存在している。いわば、淵明のゆるぎない信念こそが、唯一《酒の文学》の本質となるものでありながら、旅人のそれは《望京》へと揺れているところに、奈良朝初頭という時代の精神史を認めなければならぬ。旅人の大宰府の文学は、その意味において《望郷の文学》でもあつたのである。そこに、旅人の大宰府における辺境性の文学の姿を見ることができるのである。そして、それが東アジアの辺境性として現れた文学の姿でもあつたことを知るのである。

五 おわりに

旅人の文学が、どのように漢文学と深くかわつているのか。その一つの問題を提起するのは、大宰府における「讃酒歌十三首」の成立であろう。ここでの酒は、それは比喩として存在するものであり、あくまでも「賢しら」と対峙するところの、一つの立場を主張するための道具である。

それは、旅人の思想的な側面を表す問題であったのである。そのような酒のありようは、まさに漢文学に求めることの出来る酒の世界であった。しかも、その酒は世間の形式や名声から逃れて、真実を求める人間たちの生き方の比喩としてのそれであった。酒にこそ真実があるというこの立場は、もう一つの理想の生き方であったに違いない。そうした、理想と現実という対立する人間の生き方への関心が旅人の文学の中に現れたことの意味は、奈良朝の文学の歴史の問題として重要な存在であることを示唆しているのである。

おなじ時に、山上憶良もまた大宰府の文学に参画した。旅人とその思想は異にしながらも、旅人の文学の状況と深く絡まりつつ新たな表現の世界を可能にした作家であった。いずれも、大陸の文学と向き合い、大宰府という辺境に身を置くことによって、万葉集の文学に加わったのである。そして、この大宰府という辺境に生まれた文学は、東アジアの辺境性の文学として、万葉集の文学史の中に位置付けることができるということでもある。

注1 万葉集の本文は、中西進氏『万葉集 全訳注原文付』(講談社文庫本)による。

2 『懐風藻』(日本古典文学大系本)

3 拙稿「賢良」『万葉集と中国文学』参照

4 本文は、中文出版社『文選』による。

5 本文は、百衲本『漢書』董仲舒伝による。

6 『漢の武帝』(岩波新書)

7 詔曰、夫礼者天地経義人倫鎔範也。道德仁義因礼乃弘。

教訓正俗待礼而成。(慶雲三年三月)

朕、遐想千載、旁覽九流。詳思布政之方、莫先仁恕之典。

故賑恤之惠無隔遐方、撫育之仁普覃寓内。(養老六年四月)

8 本文は、台湾中華書局『樂府詩集』による。

9 注4に同じ。

10 「七賢」の生き方については、小尾郊一氏『中国の隠逸思想』(岩波新書)に詳しい。また、六朝時代の知識人たちの自然へのかかわりについては、同氏の『中国文学現われた自然と自然観』に詳しい。

11 注4に同じ。

12 本文は、松枝茂夫・和田武司氏訳注『陶淵明全集』(岩波文庫)による。

13 斯波六郎氏『中国文学における孤独感』

本稿は、一九九〇年十一月十日に行われた上代文学会シンポジウム(於早稲田大学)の原稿をもとに加筆したものです。